

OB訪問

今回ご紹介するのは卒業6年目を迎えたST(言語聴覚士)清水さん。
札幌ドームを間近に望む柏葉脳神経外科病院の
リハビリテーション科に所属、
担当する急性期病棟でSTリーダーとして活躍中です。

柏葉脳神経外科病院(札幌市) 言語聴覚士
清水 拓矢さん(心理科学部言語聴覚療法学科2009年3月卒業)



6年目の仕事

清水さんはST(言語聴覚士)として担当患者さん1日10人前後の言葉や嚥下(えんげ:飲み込み)の訓練を行うほか、2つに分かれる急性期病棟の一方のSTリーダーとして、STが関わる患者さんすべての状況を把握、週2回の病棟総回診にも参加しています。昨年度からは新人教育、今年度からは実習生の指導にも携わるようになりました。日本摂食・嚥下リハビリテーション学会認定士めざして勉強も進めており、STとして、医療者として、着々と前進している卒業生です。

避けて通れぬ問い

清水さんが担当する病棟には急性期(発症直後)治療後の患者さん、パーキンソン病など神経疾患や脳腫瘍等の患者さんが入院しています。医療職の例にもれず、清水さんの毎日やりがいと厳しい自問との背中合わせです。

避けて通れない問いの一つに、治療やリハビリで一時的回復は望めても、病状進行は止められない病、たとえば脳腫瘍の患者さんにどう向き合うかがあります。「最初は口から食べ、意思疎通できる期間を最大限延ばすために嚥下や言語面の維持を中心に訓練しますが、最終的には体が硬くなるのを防ぎ、少しでも楽



多くの患者さんが退院後も障がいとともに日常生活を送ることになります。清水さんがめざすのは、患者さん自身が「できるだけのことをした」と思うことで前向きになれるリハビリです。



言語訓練では音楽療法士とも連携。太鼓のリズムが発話リズムのコントロールを助けたり、ふだんは出ない声が出せるといふことも多いそう。患者さんの意欲を引き出す効果も大です。

に呼吸できることが、STにも目標となります。当然すべての過程でベストを尽くしますが、それでも看取った後は自分の関わり方でよかったのか、深く考えさせられます。

そんなとき患者さんのご家族からいただく感謝の言葉は、清水さんにとっていちばんのねぎらいと次に進むための励みになります。

「人」を診る

清水さんのモットーは「病気ではなく人を診る」。医療現場で経験を積むほどに、より深く心に刻んできたことです。生活環境、性格、病棟での様子などあらゆる面から患者さんを理解し、STの専門分野に偏らず患者さんの生活の質を考えます。

脳卒中(脳梗塞、脳出血、くも膜下出血等の症状の総称)患者さんはじめ、清水さんは突然の発症で大きく変えられてしまった人生をたくさん見てきました。「患者様は180度の変化といえるような現実に直面し、落ち込み、不安と共に

入院生活を過ごさなければなりません。STとして障害像を評価し訓練を行うだけでなく、患者様の辛さを思い、心の声に耳を傾け、こたえない」。清水さんの言葉は柏葉脳神経外科病院が重きを置く「心と体のリハビリテーション」そのものです。

チームの中のST

柏葉脳神経外科病院では、大きくスペースをとった理学療法・作業療法用リハビリテーション室の向かい側に言語聴覚療法室があり、その並びには音楽療法室、臨床心理室が続いています。スタッフの動きを見ていると複数分野の連携の確かさが伝わってきます。「患者様ごとのリハビリ期間やゴールはPT(理学療法士)、OT(作業療法士)と共に考えます。STでも必要があれば歩行訓練もしますし、音楽療法士とも組みます」。

「医療職の中でも未知数の将来性があることからSTを選んだ」という清水さん。実習でやってきて清水さんの指導を受ける学生にも、STの仕事の現在進行形の広がり、可能性、魅力を存分に伝えてくれるはずですよ。



柏葉脳神経外科病院では13人のSTが活躍中。横岡優美子さん(前列右から2番目)、鈴木暁さん(後列右)は共に本学の言語聴覚療法学科の前身である札幌医療福祉専門学校言語聴覚療法学科の卒業生です。